
誇り高き槍兵

蒼い臆病者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誇り高き槍兵

【Nコード】

N2845W

【作者名】

蒼い臆病者

【あらすじ】

神話のクー・フリーンは女だった

死んだ彼女は、神に与えられた力を持ち新たな世界に転生する

プロローグ

プロローグ

彼女は死にかけていた。

修行時代の親友とその息子を戦争とはいえ、殺して誓い^{ゲッシユ}を破り身体が痺れていた所を敵に奪われた自分の槍、ゲイ・ボルグで貫かれて致命傷を負ってしまった。

その敵は、殺したが私はもうすぐ死ぬ。自らの誇りを折らぬため自分の体を柱に縛り付け静かに自分の死を待つ。

「これまでか……。我が王よ、こんな所で死んでしまう私をお赦してください。最後まで……。貴方と共に……。いたかつ……。た……。」

彼女、「クー・フリーン」は静かにまぶたを閉じその人生に幕をおろした。

起きよ

頭の中から聞こえるような不思議な声に彼女は疑問を持った。

自分は、死んだはずではないのか？この声は誰だ？

起きよ

彼女は、その声に言われたとおり目を開けた。

すると、目の前に星の海の様な空間が広がっておりその真ん中に真っ白な服を着た老人が立っていた。

貴方は誰だ？

吾に、名前はない。吾は、全であり一であるもの。

神とは、違うのか？

それは、便宜上の名前でしかない

じゃあ私はとりあえず神と呼ばせてもらおうよ

然り

で？神が、私に何の用だ？

お前は、誇り高く死んだ。お前のような人間を死なすのは惜しい
だから、別の世界に送ることにした。

それはありがたいが、なぜ私なのだ？

世界が、お前を死なせるのを惜しんだ。だから、私の元へお前の魂
を送った

それはありがたいな。で？

私は、どんな世界に送られるのだ？

お前が生きていた頃よりもはるかに時代が進んだ世界。魔法が存在
する世界だ。

魔法か・・・

聞きながら私は考える。

私の生きていた世界では魔法はまやかしとされていたが
今から行く世界にはそれが存在するという。
自分の槍の腕には自身があるが些か心細い

神よ、私に魔法に対抗する力をくれまいか？

確かに私は槍では誰にも負けない自信があるが
魔法相手ではどうしようもない。

よからう。では、お前に魔眼をやろうこれは、見た相手の魔法の魔力を喰らい自分の魔力にする効果がある。

これは、心強い。

ところで、今から行く世界では私も魔法を使えるのか？

然り

そうか、それは楽しみだな

これで私は、まだまだ強くなれる。

そうか。では送るぞ。

とりあえず、一般常識程度は吾の方から頭の中に入れておくから心配はするな。

今から行く世界でも誇り高く生きて行くがいい

わかった。

色々世話になったな、ありがとう。

そして、私の意識はそこで途切れた。

主人公設定

主人公設定

名前クー・フリーリン

性別 女性

容姿 fateのランサーを女にしたような見た目で後ろ髪を真ん中だけ伸ばしてくくって尻尾みたいになっている

身長 168cm

体重 ??? (重くはない)

主な戦闘法 魔眼で魔法を消して相手の懐に飛び込む。

保有スキル

心眼(真) A

修行・鍛錬に置いて鍛えられた戦闘を有利にすすめる為の洞察力

矢避けの加護 A

彼女に投擲された槍や矢などは彼女に当たる前に軌道を変えられ無効化される。

当てるためには、死角から撃つか、彼女の視界に映らない超長距離から撃つしかない

ゲイ・ボルグ

放てば必ず当たると言われてるがそれは彼女の技術に寄るものらしい。

この槍自体の能力は、「これで突かれた心臓は決して治らない」

第一話

第一話

私が目を覚ますとそこは森の中だった。

私は、素早く伏せ周りに危険な物が無いか見回して何もない事を確認すると

そこで、ようやく一息ついた。

「ふう。此処は何処だ？とりあえず人気のありそうな・・・!?」
その時、私の頭の中にこの時代の情報が押し寄せた。

この世界のこと、この時代の知識、私が今いる国のこと、神からも
らった魔眼の使い方など。

ありとあらゆる、情報が私の頭を埋め尽くす。

「これは些か・・・。厳しすぎぞ、神よ。」

どうやら、この時代は私が住んでいた世界と大まかには変わらないらしい。

しかし、魔法が有るのでどうやら伝説とかにも出てくる魔物も居るところには居るらしい。

とりあえず、移動しようと考えていると、上から声かけられた

「私の月見を邪魔するとは。覚悟はできているだろうか侵入者。」

見上げると満月を背景に木の上に立つ金髪の少女がいた

sideエヴァンジェリン

私が、今日は満月で魔力も上がり上機嫌に月見をしていると
結界の方から侵入者の反応がした。

ちっ！人が上機嫌で酒を飲んでもとゆうのに。

「マスター。」

「仕方ない・・・行くぞ茶々丸！」

「はい。マスター。」

そう言っただけは侵入者の気配がする方へ向かう

程なくすると森の中で侵入者らしい女を見つけた

見る限り武器は槍だけ、魔力も感じない

どうやら侵入者は小物らしい、その事実により更に機嫌が悪くなる

「私の月見を邪魔するとは。覚悟はできてるだうな侵入者」

sideエヴァンジェリンEnd

どうやら、この辺りのを警護しているものらしい

しかし、この少女からは人間らしい気配がしない。

どうゆうことだろうか？とりあえず、訪ねてみるか。

「それは済まなかった。ところで貴女からは人らしい気配がしないのだけれどどうして？」

私がそう聞くとその少女はニヤリと不敵に笑い

「そりゃそうだろう。なんせ私は600年生きた吸血鬼なのだからな！」

なんと！早速魔物に会ってしまった

しかし、吸血鬼といえば強大で不死だという

私の槍がどこまで通じるか試してみるか。

「ならば、一手ご指導願えますか？吸血鬼さん？」

そう言って私が槍を構え殺気を向けると

少し驚いたようにうに見つめてきた後面白いものを見つけたような顔をして

「私が吸血鬼だと知った上で勝負を挑むか！面白いやつだ！我が名はエヴァンジェリンダーク・エヴァンジェル「闇の福音」と恐れられた悪の魔法使いさ！」

驚いたことに魔法使いでもあるらしい。

それに、二つ名が有るということはかなりの実力者らしいこれは、新しい世界について早々ついてるな

「そちらが名乗ったならこっちも名乗らなければな。我が名は、赤枝の騎士クー・フリーリン」

私がそう名乗ると今度こそ少女は驚愕の表情を浮かべた
どうかしたのだろうか？

S i d e エヴァンジェリン

今あの女は何と言った？

自分を「アノ」クー・フリーンだといったのか？

「ふざけるな！貴様があのクー・フリーンだと！？アイルランドの光の御子だとも言うつもりか！笑わせるな！大体クー・フリーンは男だ！」

私が叫ぶとその女は身体を前に傾けすでに突撃の準備をしていた

「此処の世界での私に関する伝承がどうなってるかは知らないが」
そう言いながらその女が消えたと思ったら一瞬で背後に回りこまれた
はやい！？全然見えなかったぞ！？

「今は戦いだぞ？よそ見などしてていいのか？吸血鬼、いやエヴァンジェリンよ」

そう言っつてその女は神速の突きを放った

「マスター！」

そう言っつて茶々丸が背後からの一撃を受け流しその女に蹴りを入れる
その女は少し驚いた様だが冷静に蹴りを槍でガードしたが
茶々丸の見た目からは想像できないような蹴りの重さに後ろに飛ばされた

そして、その隙に私は魔法で追撃を仕掛ける

「リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

エプテンデキダキアレス
氷の精17頭

コエウンテース
集い来たりて敵を切り裂け

サタ・マギカ
魔法の射手連射氷の17矢！

サタ・マギカ
17発の氷の魔法の射手が奴を追いかけるが
当たる直前に軌道を曲げて一発も当たらなかった

「なに！？どうなっているんだ！？」

私は困惑した、魔法の矢が自分から相手を避けるなど聞いたこともない

何か特別な魔法か？私が考えていると侵入者の女が叫んできた

「どうした魔法使い！この程度の魔法じゃこのクー・フリーンには掠りもしないぞ！」

クー・フリーン？そういえば伝承にはクー・フリーンには矢よけの加護があつて

投擲物は彼に当たる前に自分から軌道を変えたという

それなのか？ならば、あの女は本物のクー・フリーンだとも言うのか？

そして気がついたらあの女は私の後ろに回り込んでいた
しまった！

「戦いの途中で考え事とは、恐れ入る。相当に余裕があるようだな
っ！」

横薙ぎの一撃を放とうとしていた

「マスター！」

茶々丸が私の後ろに回りこんでガードをしたので私はまた魔法を打つ準備を始めると

その女は不敵に笑い

「私をあまり、舐めてくれるなよ？」

そいうと更に力を込めて茶々丸ごと私を風飛ばし壁に叩きつけた
慌てて立ち上がろうとするとその女は私の心臓に槍を向けて

「チェックメイトだ」

「ふっ！不死の私が心臓に穴を開けられたぐらいで死ぬと思うのか？」

「忘れたのか？私はクー・フリーンだぞ？ならばこの槍はゲイボルグと決まっているだろうが」

ゲイボルグか・・・確かあの槍で突いた心臓は決して治らないと言われている

それはメンドクサイな・・・

「どうやら、私の負けのようだな。」

そう私が素直に認めるとその女は槍を収めたで、とんでもないことを口にした

「そうか。では、私は投降したいのだが？」

は？なに言ってんだこいつは？

「とりあえず、なんでか聞いてもいいか？

「うむ。実は私はこの世界に来たばかりでな。身分を証明する物が無いのだ。

そこで、かなりのお金持ちと伺えるエヴァンジェリン殿にどうにかしてもらおうと思っ

「くっくくく・・・アハハハハハ！面白い！悪の魔法使いの私にすべて任せるか！

いいだろう！お前をジジイ・・・此処の最高責任者に会わせてやる！」

私がそう言うと彼女は満足したような顔をして

「それは、ありがたい。それじゃあ、今日はここらあたりで野宿でもするか」

女がそう言いながら、こちらをチラチラ見てきた
しかもなんか目が期待でキラキラ光ってやがる
わかったよ・・・

「わかったわかった。私の家に来い」

私がそう言うのと女ークー・フリーンは滅茶苦茶顔を輝かせてい
何なんだその顔は

「私を家に住まわせてくれるのか？それはありがたい！野宿は私も嫌だからな！」

私に無理やり言わせといてよく言うな

私はため息をついた

「そうと決まれば家に帰るぞ。おい茶々丸！」

「はい、マスター」

「で？いつ、その最高責任者とやらに会わせてくれるんだ？」

「今日はもう遅いから明日だな。」

私がそう答えると彼女はうなずき茶々丸の後についてきた

第二話

第二話

「さて、じゃあお前のこれからについて話そうか」

エヴァンジェリン殿の家に付き一服してからエヴァンジェリンがそう、切り出した

「何か問題でもあるの？」

「ああ、主に2つだ。まず一つ目だがお前はこの時代の常識を知らないだろう？」

「いや、それに関しては「神」から知識だけはもらっていますよ？」私がそう言うのとエヴァは驚愕に目を見開いた

「「神」だと？本当にそんなものが存在していたのか！？いや、それならお前が此処に居るのも説明がつくか・・・」

エヴァが何やらブツブツつぶやきながら考え事をしている。それにしても、エヴァのように綺麗な子が一生懸命考えている姿はなんか、こう・・・胸が温かくなるな！

「まあ、この件はいいとして・・・次にお前の名前だ」

「名前？私の名前に何か問題でも？」

「というか名前が問題とか言われたのは初めてだな・・・」

「大有りだ。いいか？お前はこの時代では神話の英雄だぞ？名前を聞くだけで誰でもピンッと来るぐらいのな。そんなお前が宝具を引っさげて魔術師共の前に出てみる、何されるか分かったもんじゃないぞ？」

「なるほど、つまりエヴァは私とゲイボルクを前にしても何もしない良い奴と言うことだな。」

「なっ／＼／お前ふざけてるのか！？私は泣く子も黙る悪い魔法使い、エヴァンジェリンだぞ！！」

「そんな姿で言われてもな〜・・・第一エヴァ、言うほど強くないよね？正直吸血鬼ってこの程度かってガツカリしたんだけど・・・」

「コレは本当だ。吸血鬼と聞いてどんな化物みたいな奴が出てくるかと思ったら、確かに魔術ならばかなりの腕だろう、パートナーとの連携もしっかり取れていた。だが、その程度で負けるようなら英雄などやっていけない」

「それは、私がこの学校の結界で力を抑えられているからだ！全盛期の私なら貴様にでも勝つ自信があるぞ！」

「ほう・・・大きく出たなエヴァ、この私に勝てるん？ならばそれを証明してもらおうか？」

私が自信満々の顔でエヴァを挑発するとエヴァは悔しそうな顔をして「クッ・・・！ああそうだよ！証明できないよ！なんか悪いか！」逆上されてしまった

「まあ、いつか貴女の本気を見れる日が来ることを楽しみにしておくよ」

「フッ、言っとけ！吠えづらかかせてやる！」

「で？話がそれたけど、私の名前をどうするの？」

「それたのはお前のせいだろうが！取り敢えず考えたのがクー・H・ランサーなんだがどうだ？」

「ふむ・・・一応元の名前は入ってるわけね。なら、私に文句はないわ。ありがとうねエヴァ」

私がそう言ってお礼を言うとおエヴァは顔を真赤にしてそらしながら「フ、フン！別に貴様のためにやっているのではないわ！」

それを見た私は顔をニヤニヤさせながら少し意地悪することにした「へえ〜じゃあわたしを助けることにエヴァにとってどんなメリットがあるのかな〜」

そう言うとお口オロした後何か名案が浮かんだ幼な顔をした後

「お前を従者にするために恩を売っておくのさ！」
それを聞いた私は真剣になり

「エヴァ私に従者・・・いや、貴方の騎士にしたいのなら私に従えるほどの強さと誇りをもちなさい。それがなければ私は誰に対しても膝を折ることはないわ」

「ふん！そんなこと分っておるわ！むしろそんな簡単にお前が私に忠誠を誓ったら面白くないだろ？」

エヴァはそう言って笑っていた。もしかしたらエヴァなら私の主になる日も来るかもしれないな・・・

「なるほどね、まあ気長に待っておくよ」

「さて、話も済んだし今日はもう寝ろ明日ジジイの所に連れてってやる」

「分かったわ。おやすみエヴァ」

「ああ、おやすみ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845w/>

誇り高き槍兵

2011年10月9日16時01分発行